



TITLE:

祝辞

AUTHOR(S):

太田, 慎一

CITATION:

太田, 慎一. 祝辞. 静脩 2000, 36(3): 7-8

ISSUE DATE:

2000-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37552>

RIGHT:

えた京都大学図書館は、厳しさを増す環境と挑戦すべき多くの課題に直面しているといわねばなりません。

うち続く行・財政改革のもと、きわめて限られた財源の中で、いかに従来型図書館と電子図書館とのバランスをとりつつ図書館機能を充実させてゆくか。この延長上には、国立大学の独立行政法人化に対して図書館が如何に対応すべきかという課題も浮上してくるやに思われます。

大学改革との関連では、一方でカリキュラム改革と連動しつつ、自主的な学習を期待される学生諸君に、どのようにして充実したサービスが行えるのか、また一方では大学院重点化によって増大する大学院生、社会人や留学生に、い

かにしてより高度なレファレンス・サービスが行えるかが問われています。さらに、膨大な書誌情報の「遡及入力」、学内および大学間の図書・資料相互利用と迅速なデリバリー、図書・資料の収集と保存図書館機能の追及、情報倫理の確立と著作権問題への対応、国際交流の推進など、直面する課題は枚挙にいとまないものであります。

いま、京都大学図書館は、全職員が自己啓発と能力開発に努めて、こうした課題に挑戦し、図書館機能の更なる活性化のために努力せねばなりません。なにとぞ各位におかれましても、今後とも京都大学附属図書館を温かく見守り、ご支援ご鞭撻をいただきますようお願いいたします。私の式辞とさせていただきます。

(きくち こうどう)

式 辞

文部省学術国際局学術情報課長 太 田 慎 一

京都大学附属図書館創立百周年に際しまして、心よりお祝い申し上げます。

あらためて申し上げるまでもなく、大学は知的資産を生産・蓄積し、かつ更新しています。生産・更新については、研究者の方々が日々携わっておられるところですが、蓄積している場が図書館といえることができるでしょう。

フローとストックという経済学の言葉でいえば日々の研究がフローであり、研究成果がストックということになると思います。



このような場で、はなはだ幼稚なことを申し上げますと、私が子供の頃、なぜ日照が最も強い夏至が6月にあるのに8月に気温が最も高くなり、冬至が12月にあるのに2月に気温が低くなるのかということでした。その後、微積分を勉強しますと、日照は気温の上がり具合すなわち微分なり差分を与えるものであるので、日照がコサインカーブとすると、気温はその積分であるサインカーブ、すなわち約4分の1年の遅れをもって気温の上昇カーブが描かれることが理解できたわけでありました。

ここで申し上げたいことは、例えば植物が成長するためには、日々の糧である日照も大事ではありますが、もう一つ重要な環境因子である気温も重要であることです。フローとストックはお互いに関連するものですが、これら両者が重要なのでありまして、日頃財政局と我々が折衝している場面でも、フローについては比較的良好に理解されるのですが、ストックの重要性はなかなか理解してもらえないことを痛感しております。

先ほどの長尾総長の、我が国の大学図書館に対する投資がはなはだお寒い状況であるというご指摘は、残念ながら当を得ており、大学図書館行政を担当している私としてははなはだ耳の痛い話ですが、文部省としてはその重要性を認識しつつ、今後も重ねて努力して参りたいと思います。

幼い話をもう少し続けさせて頂きますと、中学校の時に習った論語の言葉に「温故知新」とか、「学ばざればあやうし、思わざればあやうし」という言葉がありました。学ばないのは、最近よく初中教育で指摘される詰め込み主義で、知識だけは増えてもそれが真の生きる力に結びついていない、あるいは応用力がない状態を示しているのでしょう。逆に思えば学ばざればというのは、高等教育あるいは研究場面での現状を示しているのかも知れません。すなわち、新しいものを生み出すためには大いに「思う」必要があるわけですが、それが強調されるあまり、図書館にきて学ぶことがややおろそかになっているのではないのでしょうか。学ぶことも思うことも双方必要なことであり、これらはあくまでバランス上のこととは思いますが。

さて、図書館については、近年電子図書館の話題がさかんであります。図書館の世界の外でも情報のデジタル化が急速に進行しておりまして、ネットワークを通じてテキストデータのみならず大量の音声や画像データが流通しています。

これにつきましても、予算配分のバランスを考えると、端末やネットワーク周辺機器等、ハードウェアの整備は進んでまいりましたが、それに比べてコンテンツやソフトウェア関係の予

算が延びにくい状況を痛感しております。どうしても、財政当局を含めて我々は素人ですから、いわゆるハコモノとかパソコンとか、形のあるものは整備状況が目に見えるものですから理解し易いのですが、ソフト面は目に見えにくいいため、ともすれば軽視され易い傾向があります。この場でこのようなことを申し上げても言い訳にしか聞こえないとも思いますが、ソフトの重要性についても是非いろいろな場面で皆様方が声を大きくして強調されることを、この機会をお借りしてお願いしたいと思います。

京大図書館は百周年を迎えました。これからの百年を考えますと、独立行政法人化の話もありますし、全く予断をゆるしません。電子図書館がどうなるかについても、現在は電子化の方向性が見えているだけで、すなわち我が近傍の微分係数ベクトルのような方向性が見えているだけで、大局的な解がどこに行き着くかわかりません。正直10年先の姿を予想することが非常に困難になっています。

これからは大競争時代に突入すると言われています。ここに外国のかたもご列席ですが、私は日本国の公務員でありますので、国際的に友好的な競争関係を保ちながら我が国の学術の基盤整備に今後とも取り組んで参りたいと存じます。

最後になりましたが、図書館長、また前図書館長であられます総長をはじめ、京都大学図書館の関係の方々のさらなるご尽力にご期待申し上げ、京都大学図書館のますますのご発展をお祈りして簡単ではありますがお祝いの言葉とさせていただきます。

(おおた しんいち)